「ヴェニスに死す」（トーマス・マン）

聲望赫々たる作家グスタフ・フォン・アシェンバハは五十歳の誕生日に貴族の稱號を與へられたが、それは彼が若い世代にとつて「模範と呼ぶにふさはしい純粹な形式」を用ひて、克己の精神に生きる英雄的な主人公を描き出し、人生に於ける「深淵」や「濁れる深み」や「墮落せるものを斷固として退け」る高潔かつ剛毅な作家精神を貫いた事が評價された爲であつた。「頑張ること」、それこそは「彼のモットー」だつたのであり、今も彼は創作といふ「意志の强烈と細密」とを要する仕事に日々精勵してゐたが、或日、仕事に疲れミュンヘンの自宅から散歩の足を伸ばしてさる公園に至り、「遠方からやつて來た外國人」らしい男の姿を認めると、突如、久しく忘れてゐた「遠い國をはげしく憧れる氣持」に捉へられる。それは「仕事場からの離脱の衝動」であり、「旅への誘ひ」でもあつた。

かくてアシェンバハは「比類なき幻想的な異國情緒に浸」るべくヴェニスに赴くが、ホテル

に着くと、ポーランド貴族の一家が滯在してをり、その中の十四歳ぐらいの少年の「すばらしい美しさ」に彼は茫然として、少年を見かける度にその優美な姿態や「エロスの神の首」さながらの美貌に魅了され、少年から目が離せなくなる。しかし、ヴェニスの不潔な有様には辟易して、一旦は町を離れる氣になるものの、少年との別離の辛さには耐へられぬと思ひ知つて翻意する。そして、日々、少年の跡を追つてゴンドラの浮ぶ運河や海水浴場や教會、果ては一家の部屋近くにも出沒する。しかく「血迷つた」老大家は「人間の理性と尊嚴とを足下に蹂躙して快哉を叫ぶ魔神の指圖に從つてゐたのだ」。

やがてヴェニスの町に消毒藥の臭氣が漂ふ樣になり、次第に町を引揚げる外國人が增えて來る。觀光業の損害を恐れ官邊はひた隱しにしてゐたが、コレラの流行が始つたのだ。だが、少年の一家が滯在してゐる限りアシェンバハは町を離れる氣になれない。この「戀に溺れた男」は「情熱が繰出す馬鹿者を引張る綱」に引摺られるが儘に、「沒落の不倫と狂氣を味はひ盡したいと希ふ。老醜を恥ぢ、少年の歡心を買ふべく身仕舞にたつぷり時間をかけ、頻繁に美容室に通ひ、白髮を染め、美顏術を施して貰ふ。けれども、遂に少年達がヴェニスを發つ日が來た。コレラに感染したアシェンバハは、出立前に海邊で遊ぶ少年の姿に視線を投じつつ息絕える。

死の二三日前、アシェンバハは、その昔「老いたる賢者」ソクラテスが「愛らしい若者」パイドロスに寄せた戀慕の情に思ひを馳せ、自らをソクラテスに擬してかう思ふ、我々は「深淵を否定したい。人間の品位を保つてゐたい」、だが、「どうじたばたしようと、深淵はわれわれを引寄せる」。この作品に描かれるのは、「人間の品位を保」ち「深淵を否定」したいと心から願ひつつも、どう足掻いても深淵に「引き寄せ」られて了ふ人間の悲劇であつて、かかる二律背反の苦惱は生涯作者マンの心を引き裂いた。「沒落の不倫と狂氣を味はひ盡」したがる內なるアシェンバハの存在は彼を脅かして已まなかつた。「藝術家といふものは犯罪者の親類の様なものだ」と彼の云ひ云ひした所以だが、エーリヒ・ヘラーによれば、マンは死の一年前、「おまへの姿は、いかにもうさんくさい」といふハムレットの科白が常々「すつかり親熟した自分への呼びかけの言葉」（前田敬作他譯）だつたと手紙に書いてゐたといふ。自分は「うさんくさい」、その自覺の有無が、畢竟、人間の賢愚を分つのだが、「眞に道德的なのは自己批判だ」と喝破した、いかにもマンらしい逸話である。（高橋義孝譯、新潮文庫）